
地球が産んだ遺産

鎖羅棄 奈奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球が産んだ遺産

【Nコード】

N0030B

【作者名】

鎖羅棄 奈奈

【あらすじ】

この世のものとは思えない” agodtoinvitedestruction”一滅亡を呼ぶ神一と呼ばれた存在。それは、ヒトの形はしていても、中がとんでもなく凶暴だ。その存在はこの世を変えていく。だが、ある人間との出会いが「それ」を変えていった。・二人が中心となるこの物語。最後はどんな結末が待っているのか・・・

プロローグ（前書き）

皆さんが思っていたいただいている恋愛とは、
ちょっと違うかもしれません。
せん・・・

プロローグ

地球は、自ら産んだ人間達が自分を苦しめている・・・

だから、地球はまた新たな命を育んだ

要らない人間たちを殺すために・・・

だが、新たな命は、人間全てを滅ぼそうと行動する。

地球はその命を悲嘆に思い止めようとする。

第1日目：出会い

「ツ・・・ハッ、ハッ」

「待てえ！」

狩り用の弓や、槍を持って大勢の人たちが若い女性一人を追いかけている。

「っ！！ハッハッ！！」

だんだん息のテンポが短くなってきた。

（もう・・・だめ！！）

深い森の中に逃げ込んだ。

ガサガサッ！！

「っ！　くそっ！　森の中じゃ動きづらい上、身を隠す場所が多いぞ！」

ガサガサッ

「ええい！草木が邪魔だ！」

「やめてよ！お姉ちゃんとは仲良くしてたじゃない！」

森の中では大人から子供までいた。男の人が少女の頭を　ポンツと乗せるように叩き、こう言った。

「確かにあの子はいいい子だった。だがな、あの子が自分で「私は人でも、ましてや動物でもない。」と言った。あの子は・・・」
その瞬間、

ガサガサッ

「そこか！出て来い！！」

スツと出てきたのは

「何だ。レイスさんか。」

安堵の溜め息をついた。

レイスと呼ばれたのは、二十五歳の男性で、警察の中の「特殊部隊」に所属していて、「S・POLICE」（スペシャル・ポリス）と背中に刺繍された防弾チョッキを着こなしている。だが、顔はおとなしく、ひ弱な顔つきだった。

「何かあったんですか？」

ある任務で来ていたレイス。偶然 通ったらしい。

「女を見ませんでしたか？二十歳ぐらいなのですが・・・名前はレティ」

「二十歳ぐらいのレティさん。わかりました。私が探します。この森は男性でも危険なので・・・」

「本当ですか？！じゃあお頼みます」

よほど信頼しているのか引き下がっていく。

「・・・もう出てきても大丈夫だよ」

自分が出てきた草むらからさっきの人が出てきた。

「た、助かりました。ありがとうございます。」

服も裸足の足もズタボロだ。

「・・・」

「・・・？」

レイスは彼女の顔・体つき等から得た情報を基に質問した。

「・・・君、レティ？」

「・・・あ・・・」

「やっぱり」

「あっ！あの人たちに言うんですか？」

彼女の口は言っていなかったけど、一生懸命「言わないで！！」と訴えていた。

「大丈夫」

それだけ言って背中をレティの方に向け、手を後ろにしてしゃがんだ。

「え？」

「歩けないでしょ？」

「あ・・・いや・・・」

「消毒しないと、乗って？」

数秒ためらったけど、その遅く広い背中に自分の体を託した。

「レイス宅」

「いたっ!!」

「!! ごめんっ!!・・・だ、大丈夫？俺、消毒苦手なんだよね・・・自分でやる？」

「いえ！して下さい!!」

「・・・」

「・・・」

しばらく沈黙が続いた。

「くすっ」

沈黙を破ったのはレティだった。

「ん？どうしたの？」

「レイスさんって普段自分のこと俺って言ってるんですね」

「・・・あれ？今自覚は無かったけど。言ってた？」

「はい。」

自覚が無いというところに微笑を浮かべていた。

微笑を浮かべながら答えるレティを見たレイスは、顔を赤くしていた。

「あっ、そういえばあの時言ってた通報ってもうやらなくても大丈夫なんですか？」

「ああ、あの森に、よく凶暴な猪が出るから見回りに・・・そうい

うことは階級が下の人がするんだけどね。」

「ってことは、レイスさんは階級上なんですか？」

「階級は・・・中の下・・・かな？一応自分の小隊は持ってるけどね」

「へえ・・・」

レイスの照れた顔はどこか愛嬌がある。足や腕は、打撲やかすり傷、葉っぱで切れたと思われる切り傷がけっこうある。

ふとレティの脳裏に浮かんでくるいろんな言葉・・・

「・・・」

見ず知らずの他人をどうしてこんなに優しくするの？

「・・・」

たかが消毒ごときでこんなに真剣になる人・・・

「・・・」

レティは、自分の体が熱くなっていったのがわかった。

「できた。」

椅子に腰掛けていたレティ。手の消毒が終わり、すでに足の消毒の三分の二が終わっていたレイス。

村人達の反応を見た、この人・・・

この人は私の事をどう思っているんだろう・・・

可哀想な人・・・？

ただの受け入れてもらわなかった人・・・？

それとも・・・

「？ 顔が赤いみたいだけど 熱？」

レイスは自分の額と、レティの額に、自分の手を当てた。

「うーん。あるのかな？」

今度は自分の額を、レティの額を当てた。目を瞑っているレイス。顔が近い。恥ずかしい。

ゆっくり開いたレイスの瞳。

「っ!!！」

レティの顔はさらに赤くなる。

「~~~~!!!! いやっ!!!!!!！」

思わず突き飛ばしてしまった。

「ごごごめん!!！」

女の人に大声を出されたうえ、突き飛ばされてしまった自分。びっくりして思わず謝った。

「なな、何かしたかなっ!!！」

「へ？」

レティは自分がしたことを理解するのに数秒必要だった。

「ごごごめんなさい!! 顔があまりにも近かったものだから!!！」

「へ？」

レイスの声が裏返った。

「・・・」

だんだんレイスの顔が赤くなっていった。それを見ていたレティまで赤く・・・

「お詫びに私のこの部屋を宿代わりに使ってください。」

「えっ?!・・・でも見ず知らずの人を泊めてしまっていないんですか？」

「私は問題ないです。」
「・・・でわお言葉に甘えます。」

綺麗な朧月が見える窓の近くのベッドでスヤスヤ気持ち良さそうに寝ているレティ。

ギシッ

レイスの部屋の床は木製でできていて、
” 誰かが歩いただけで”
軋んだ音がする。

カチャッ

ドアから出て行くのは収集で呼び出されたレイスだった。それに気付かず寝ているレティ。

カチャン

鍵がかかった音が部屋に響く。

一翌朝一

「レイスさん？」

起きた時にはレイスの姿が無かった。レイスの部屋は古ぼけたマンションの最上階の一番奥の狭い部屋だった。

その狭い部屋の隅々まで探したが、見当たらない。レティは、あわてて部屋から出た。みたことの無い都会の姿。だが、彼を見つけるためにただひたすらレイスをさがしに走る。

昼過ぎ、一旦休憩が入ったレイス。皆は休憩場に行くが、レイスだけ着替え室に向かう。その背中を見たのは同僚の「ロイ」だった。

「レイスちゃん。どこか行くのか？」

軽い口調で言い、レイスの肩をポンポンと叩いた。

「ああ。心配事を家に残してきてしまった。一旦帰るがすぐ戻る。」
言い残したらすぐに歩き出した。

「あいよ。」

背中に「了解」を告げるとロイは皆の居る休憩場に足を運んだ。

心配事とは、やはりレティの事だった。部屋の前で立ち止まる。

「・・・あれ？」

鍵も使っていないのにドアが開いた。

「かぎ・・・かけたよな。・・・」

しばらくドアノブを見つめる。

「・・・！！」

ドアを強引に開けて中に入る。

「レティさん！！」

応答無し。

「くそっ！！手紙でも置いておくんだっ！！」

あわてて外に飛び出たレイス。

（道もわからないのに！危ないことには巻き込まれないでくれ）
走りながら強く願うレイス。

その願いも届かず、

「・・・っ」

見た目からして悪そうな人達に囲まれ、困っているレティ。ただでさえ怖い人達なのに、ナイフをゆっくり上げられた上、妖笑を浮かべられ、半分涙目になってふるえるレティ。

ブンッ！！

「！！」

ナイフが振り下ろされた。

「!!」

身構えて目を強く瞑った。

「・・・あれ？」

なかなかおりてこない。身構えたまま恐る恐る目を開けた。

「まったく。弱いものいじめはやめるんだな。」

目の前には若い男の人が自分に背を向け立っている。

黒いコートを軽く着ていて、髪は背中まで届いているロングヘア。銀色の髪。

「大丈夫かな？そこのお姫様」

レティは目を見張った。

「レイスさん？」

不陰気も顔も似ていた。

「・・・レイス・・・？　・・・そうか。奴はまだ生きているのか・・・」

訳の解らないことを言ったその人は、自分のコートの中の腰に手を運び、何かを抜き出した。

ターーン・・・

上に向けて発砲した。そう。抜き出したのは銃だった。そのとたん、レティを囲んでいた人達は走って逃げていった。

「・・・あ、ありがとうございます！」

「いや。礼には及ばない。・・・悪いがレイスに会うのはまだ早い。失礼するよ」

「え？」

そのとき。

「レティさーん!!レティさーん!!」

その声は、レイスの声だった。レティの顔は一瞬にして明るくなった。

「レッ！・・・」

声を出そうとすると腹部に激痛が走った。
倒れるところに「その男」が受け止めた。

「レティー！！」

（レイス・・・さん・・・）

薄れゆく意識の中、その男の顔が一瞬だけ苦痛にゆがんだのが見えた。

気のせいだったのか、それとも・・・

ぽっっ・・・ぽっぽっっ・・・さーーーーー・・・

二人を引き裂くように雨がすごい勢いで降ってきた。

「レティ・・・」

第2日目..血と雨

雨は一向に止まない。というより気配すら見えない。

[illegible]

だんだんと雨が弾ける音が強く、強くなっていく。

「ハアッ……ハアッ……ツ……一度帰ってみるか。」

何時間も走った気がする。

だが足は止まることを許さなかった。

タンツ、タンツ、ポタポタツ

レイスの足音や服や髪から落ちる雨の雫の音を、古い木造マンションの床が拾い上げた。

戸を開けると、待っていたのは……

「ハロ！」

•
•
•

・
・
・
同僚のロイだった。

「って……びしょびしょじゃなか!!」

「ああ」

「ああつて……」

ロイ奥へと入っていくが、すぐに戻ってきた。手にはバスタオルが。「何やってたんだよ！！ なかなか帰ってこないから中佐が怒ってたぞ。」

ロイはレイスの頭にバスタオルをかぶせた。

「何があつたんだ？」

レースは頭を拭いている。

「……用事があつたんだ。」

「だから、その用事を聞いているんだって!!」

「もう一度行ってくる」

「もしかして、人探しか？」

「・・・」

レイスは黙ったままである。口を開いたのはロイでも、ましてやレイスでもなかった。

「二人とも、こんなところで何してるの？サボりかい？」

レイスの後ろに美人の女性が立っていた。

「あっ！あねさん!!」

あねさんと呼ばれた華やかな女性は、二人の上官である。

「大事な用があるって聞いたが・・・俺に黙って何してた。ああ？！」

「ひっ！」

ロイがおびえる。

「こ・・・怖い・・・」

レイスが震える。

「とっとと戻るんだよ!!」

あねさんが怒る。

「はいっ!!」

従う二人。

「んっ」

目を覚ますレティ。

（レイスさん・・・？）

意識がはっきりしてきた。

「まだかよ！早くこいつで試し切りさせろよ！」

「まあまあ」

向こうでいろいろな話し声が聞こえる。

「・・・っ」

力が入らない。

ぴくっ・・・ぴくぴくっ・・・

突然痙攣を起こしていた。

「ああっああああっ」

「こ、こいつやばくね？」

「・・・」

「兄貴！」

「こいつは・・・面白くなる・・・」

「あああああああああっ！」

「レース！！戻るのが遅い！！」

司令室から響いてくる怒鳴り声に驚く軍人たち。

「すみません・・・」

レースもさすがにびっくりしたらしく、肩が上がっている。

「今は大変な奴がうろうろしてるっていうのに！！！」

「は、はあ」

「たるんどる！お前は軍人だろ！しっかりしろ！」

「はっ」

「・・・はあ、もういい。下がれ」

「はっ！」

敬礼をしてから司令室のドアを開け、前に誰かが立っているのに気がついた。目の前にはロイがいた。

「よう！早かったな！」

ドアを閉め、溜め息をつく。

「まあまあ、そう落ち込むなって。」

「そうだな。持ち場へ戻ろう。」

自分たちの待機部屋へ向かって、廊下を歩き出した。

カチャッ

「お帰り」

待機室のドアを開けて出迎えてくれたのは、あねさんこと、レイナ大尉だった。

「疲れきった顔だな。そんなにこっぴどく叱れたのか？」

「はい。」

キーン……

（放送時のお約束。）

『αチーム、βチーム、γチーム、至急作戦司令室までお越しください。』

「お呼びだ。二人とも、行くよ！！」

「「はい」」

コンコン

「入れ。」

カチャ

「遅いぞ！チームリーダーのくせに行動が遅い！！まったくならん……」

「お叱りは後で。で、このメンバーを呼んだということは、やはり……」

「うむ。この映像を見たまえ。」

部屋は暗くなり、指令台のほうにある廃棄工場らしき建物の中が映った。建物の中はとても暗い。

「夜の映像……みたいですが、何も見えませんよ？」

γチームの隊員が口にした。それは、この映像をみているほとんど

の隊員が思っていることだ。

「やはりそう思うか。だがこの映像を取った日付と時間を見てみろ。」

皆が画面右下を見た。

「・・・まさか・・・」

「今日の・・・真昼間・・・」

「じゃあ、これは・・・」

「そうだ。暗いのではない。黒いのだ。」

「血・・・」

第3日目…新たな任務

チームの全隊員が、目的地に到着した。

「……うっ……」

先頭の隊員が、今にも吐きそうな声を喉の奥から出す。

「大丈夫か？それにしてもひどい臭いだな。」

問題の倉庫は、森の奥深い場所にあった。

「よしっ。皆、作戦通りにいくよ。」

「はっ！」

α（アルファ）チーム、β（ベータ）チーム、γ（ガンマ）チームの3チームで、五つのチームに別れ、作戦を遂行させるつもりだ。

「……全チーム。所定位置に着いたら無線を入れ、マイクを2回軽く叩くんだ。何かあれば喋ってかまわない。いいな」

「はっ！」

「ロイ少尉。1ついいでしょうか。」

「何だ？」

ロイに質問したのは、腕に小さいパソコンをつけた隊員だ。その隊員は、ミニパソコンを操作しながら話している。

「リーダーには生き物の影すら映っていませんが。」

「……あねさん。どうする？」

「……影がないからって作戦を中止するわけにはいかないわ。」

「そうだなあ。レイスはどう思う？」

「大尉の言うとおりで。とにかく作戦を実行しよう。」

「よし決まり。」

そしてそれぞれの班は、行動を開始した。

やはり、中は裳抜け（もぬけ）の殻だった。

「……」

一度任務を中断。基地に戻り、再び指令を待つことにした。

待機室で待っていたチーム班リーダーのレイス、ロイ、
「…レイス」

待機室で待っていたチーム班リーダーのレイス、ロイ、レイナ。

「…レイス」

はじめに口を開いたのはレイナだった。

「貧乏揺りをやめな！」

レイスは言われて初めて気付いた。

「ああ…」

…レイスはイライラ…いや何かを心配しているような…

「…15分で戻るなら一旦帰ってもいいぞ。」

「あねさん!! レイスまた帰ってこないかもしれないじゃんかあ！」

「ロイ! 親友のあんたが信じないで、誰が信じるんだよ!」

「…でも…まだ任務を遂行した訳じゃあないんだ! こんな事したら

…あねさんも、レイスも、タダじゃすまない!」

「わかってるわ」

「いいや、わかってないね」

「でも! こんな状態で任務を遂行させろなんて言われて、任務だけに気持ちが行くと思っっているのかい!」

「…」

3人の中でしばらく沈黙が続いた。「あねさん。ロイ。ありがとう。家の様子を見てくるだけだから。すぐに戻る。」

「…あゝわかったよ!!」

ロイは頭をかきむしりながら納得(?)をした

レイスは全速力で家に向かった。

ただただ、叶いもしない願いを胸に抱きながら…

はあはあ

ギシ…ギシ…

家の前に誰かが立っている。

「…？」

抱いていた願いが…

「レテイ？」

今

「！」

名前を呼ばれた彼女はすぐさまレイスの方を向く。

涙ぐんだ瞳を、一生懸命見開いて…

目が合った瞬間『彼女』の涙が、大粒の涙が、零れた。

「レイス…さん？」

「レテイ…」

久しぶりに見せる優しい笑顔。

やはり彼にはこの笑顔が一番似合う。

やはりすぐに帰ってきたレイス。信じたとおり、もとのレイスに戻って帰ってきた。

「あねさん、ロイ。…ありがとう」

にっこり笑う2人。

放送がなり、作戦司令室に向かう。

「今回は、諸君らの腕にかかっている。」

「あの作戦の続きじゃあないんですか？」

Y（ガンマ）チームの隊員が言う。

「ああ。今回は…」

司令が皆の目を順に見ていく。そのしぐさにレイナが危機感を感じた。

「何です？何か問題でも？」

「…神を殺してもらう」

その部屋に居たもの皆が驚きを隠せない

「司令。その『神』とは？」

「皆も知っておろう？ 『滅亡を呼ぶ神』のことだよ。」

「・・・そんな」

「そんな奴を殺せって言うのか？」

「んな無茶苦茶な・・・」

司令のその言葉で口々に私語が出てくる。

「静かにしろ！」

言ったのは司令でなく、レイナでもない。ロイが言った。

「・・・皆の気持ちはわかる。俺だって『死ねっていうことかよ』・

・とか思う。」

「ああ・・・俺たちは特殊部隊なんだ。選ばれた人材なんだ！これは俺たちにしかできないことなんだ！」

ロイに続いたのはレイスだった。2人の言葉は隊員皆に勇気を与えた。

「そ・・・そうだな。」

「ああ。俺達にしかできないんだもん！」

「いいや！俺達ならいける！」

「そうだ！俺達だから遂行できるんだ！」

隊員たちの顔を見て、司令が微笑み、頷く。

「よし。ではこれから、作戦会議を始める。」

「ふう・・・」

夜中に帰ったレイス。どうやら相当疲れているようだ。

ガチャ

ドアを開けると部屋の向こうから走ってくるレティがいる。

「お帰りなさい」

「・・・」

レイスは静かに答える。

「ただいま」

第4日目：始まりの刻。

任務の当日。

死ぬかもしれない・・・もう彼女に会えないかもしれない・・・でも・・・

「レテイ、行ってくるよ」

会議室に集まる任務班。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

皆は初めて会う神についてそれぞれ考えていた。

「やっぱり、『滅亡を呼ぶ神』って言われているくらいだから容赦なく殺していくんだろうか・・・」

「ロイ、やめな！」

「でも！あんなものを見せられて、考えない奴そういないだろ？」

「・・・」

「でも」

レイスは不安の影もなくいつもの顔で、笑って見せる。

「俺たち、そいつをやらなきゃ・・・不安、取れないだろ？」

皆はその言葉を聞いて、あっけに取られた顔をする。

「あはは！」

突然笑ったのはロイだった。

「ど・・・どうしたのさ・・・とうとう頭がいつちまったのかい？」

「・・・失礼極まりないな・・・」

あねさんに突っ込むと口元をにやけさせた

「だってそうだろう？当たり前のことレイスに言われちゃって・・・」

「そうだね。よしっ！いくか！」

隊長の言葉で隊員が喜んで動いた。

指定された場所で隊員達は待機している。
いつも通りの気持ちで、隊長の指示を待つ。

・
・
・

そこに団体の不良たちが集まってきた。

「隊長。あれは？」

「……？……ただの不良にしか見えないね。」

不良たちは近くの木に隠れている小屋へと入っていった。

「あねさん。どうするの？」

「……とにかく動きがあるまで待っておう」

「…了解。」

・
・
・

何もない。

・
・
・

「隊長。中で何かあるのでしょうか？不良も一向に出てきません。」

「…ああ。でも不用意に動くのも…」

すると。

そこにいた隊員たちの目が一斉に あるものにいった。

「あ…あねさん。」

「ま…まさか。」

「あれだね」

そう。

白髪の腰まで伸びるロングヘアの女性。

「ターゲット確認。今から作戦を開始する。」

第5日目…レース

バンッ！！

その音に引き寄せられた不良たちはそっちに睨む。その音の方にはロングヘアーの美しい女性だった。

睨んだがその美女を見たとたん睨むのをやめてニヤニヤしだす。

「よう、お姉さん。こんなところに何か用？」

不良の一人が近寄ってきた。そのとき。

・・・？

腹部から赤黒いものが出ていた。それを平気な顔をして握っているロングヘアーの女。

今度ニヤついたのはその女だ。

握ったまま、手を勢いよく引いた。その瞬間内臓のほとんどがずり落ちる。

そして、内臓を離すとその内臓を踏み潰し、つぶやいた。

「またか。・・・」

その数瞬後、レース班が突入。

「全員動くなあ！！」

レース班全員が銃を構えている。

「・・・」

片手を真っ赤に染めた女性はレイス達に背中を向けている。

「・・・見つけたぞ。神」

・・・そしてやっとこっちに向く。

「お前たちに用はない。出て行け。」

レイスと目が合った。その瞬間レイスの身体が一瞬にして硬直してしまった。

そして。また不良たちに向き直った。

「さあ。お前たち。続きをしよう。」

不良たちは皆ガタガタに震えている。

『神』は一步不良に近づいた途端、

ターンッ！！

『神』の足元に一発の銃弾が。

ロイだ。

「レイス！何してる！」

だが一向にレイスは動かない。目の焦点が合わず、さらに冷や汗は止まらない。

「レイス隊長！」

「レース！あんたが動かなかったら邪魔なだけだ！」

「う・・・うう・・・んの・・・やろおー！！！」

その気合とともにレースは自分の左手を自分の銃で撃った。
そのせいか、普段温厚なレースがキレタ。

「こらあ！！そこのおまええ！！大人しく俺たちと来い！！！」

「・・・」

そこにいた隊員達はポカン・・・としていた。

「・・・はぁ・・・」

彼女がため息をつく。

「まったく・・・おいそこの product 共。このお人よし
たちに感謝しろ。」

そして、彼女はこっちをみて…笑った
その瞬間レースの呼吸が止まった

「・・・」

隊員全員の時が止まった。

「・・・っ・・・はっ・・・」

「レイス・・・」

レイスの背中から彼女の手が出ている。

「レイスー!!」

彼女は手をゆっくり抜いていく。呼吸が小刻みのレイス。
レイスの顔が激痛にゆがむ。

「うっ」

手を抜き終わった途端レイスが倒れる。

ロイが駆け寄る。

彼女はもういない。

特殊部隊用の病室に運ばれて治療を受けたレイス。
生と死の狭間にいるレイス。
そして…

ピーーーーー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0030b/>

地球が産んだ遺産

2010年11月16日23時12分発行